

# 文化財だより

## 第21号

### もくじ

民俗芸能調査	1
平成三年度石巻市民俗芸能調査報告書	2
平成三年度新金沼遺跡埋蔵文化財発掘調査報告	11
田道町遺跡発掘調査速報	17
紙上文化財めぐり	20
平成三年度文化財めぐり	24
旧町名表示石柱設置事業	25
文化財標柱・説明板設置事業	26

# 民俗芸能

## はじめに

民俗芸能は、私達の風土に根ざした、庶民の文化であるといえます。石巻市内にもこうした民俗芸能があります。しかし、こうした民俗芸能も時代の波とともに失われつあります。

石巻市教育委員会では、こうした失われつつある民俗芸能を保護・保存することを目的として、平成三年度に民俗芸能調査を実施しました。

各芸能について実演し、現況・概要、文化財としての価値について調査を行つた。ただし、実演不可能な芸能については伝承者等から聞き取り調査を行い、各芸能についての考察を行つた。

## III 調査の結果

二頁から十頁に掲載。

## I 調査実施要項

### 調査の目的

市内に存する民俗芸能について学術的な調査を実施し、その保護・保存についての資料を得る。

### 調査対象

塩田のつば打ち唄  
南境孫舞い  
鹿島御兒神社の神輿納め唄  
小積浜の南部神楽（女神楽）

平成三年七月一日～九月三十日

調査担当者

宮城県文化財保護審議委員会  
民俗芸能研究家

千葉雄市  
千葉雄市



▲調査風景

平成三年度

石巻市民俗芸能調査報告書

宮城県文化財保護審議会委員

千葉雄二

つぼうち唄

台藩直當の製塗事業において唄われてきたりことに対する畏敬を表しての尊称とも受けよう。そのゆえか他の俗謡などよりは一段と重じられていたらしく、作業唄としては品格を感じさせる曲調である。

土記による流留の塙田に関する記述によれば、寛永二年（一六二五）流留村与惣（相）右衛門が下總國行徳（現千葉県市川市）から彦左衛門・又右衛門の二人

を雇入れたことによって、浜呑式といわれる製塩技法が導入され、良塩が能率良率で製造されるようになり、浜は大いに潤つたといわれます。当時は塩場二〇軒で、年間の着出高一〇、八〇石一二四五年で四三三二〇〇俵であつた。塩煮人数一四九人、村内には渡波町の塩焼場二二区も置かれていたといふ。三間に一〇間の御塙窑蔵軒もあり、御室空が置かれていた。塩場付与想右衛門、寛永一五年（一六三八）渡波町田四五町一歩、釜敷三九を完成、のち享保元年（一七一六）渡波町本町屋敷肝入候勘内海監修。七四一 渡波町本町屋敷肝入候勘内海監修。右衛門による渡波塩田三町七反余、台坪塩田

三五一年基が完成され、常時の従業者は九〇〇人ともなつて藩直営の製塩事業は順調に発展していたといわれる。

砂原を掘り下げ、お臺と呼ばれる細長い楕円形のタンクを構築するとき、またはその複数とする際にも、近くの山から運

が交代をしながら作業がされ、延々数間も「つぼうち唄」を数百回も繰返しがら唄われたものだといわれる。当初粘土を出窓でから、導升水を引

コリヤリヤン……とか、「ヨーリトコ、ヨーリトコナーラ……」とか、「ヤート」セー、ヨーリヤナ……、は伊勢音頭の特徴を難い。で、いる。

「アウ」を立てて土突きながら蟲を廻ら  
音頭取りが一人で唄い他の者はほ  
声をもつて掛け言葉を唱和(齊唱)す  
長時間、力を込めて叩き固める「地  
め」の純然たる作業唄だから、唄の番  
は幾つ眼ねば、粘土の固まり具合も見

「伊勢音頭」は近世初頭から、いわゆる「お伊勢語り」をした人たちによつて古市などの遊里において、荷物にならぬい喜こばれるおみやげとして覚えるものとして、全国各地に流布し、種々の民謡や門付芸などの元祖ともなつてきた。

がつくとか、時間も測れるわけで、作業上の目安ともなったが併せて、単純動作が強調されることが多いが、リズムを強めることによって感覚を付け、能率を上げさせ、チームワークの描いた作業を進めるためにも「つかうち眼」は欠かせなかつたはずである。これは歌詞に即興風な思い付きが加わって、詠っぽい色味も入り込み、語句に笑いがどよめき、再び元気をこめて歌うことで、労働力を倍加させ得る効果がもたらされた。

曲調には酒盛明らしい明るく華やかな音色で、東北の各地にも播しと飽っぽさがあり、地鳴り（土子土音き）、脇突尖（のほか）、頬人筋、木遣り音頭の系統は、多くは祝い唄に影響している。この系統は、音頭取りが唄い出し、一句切り毎に他の付け唄が受け声をもつて唱和する型式をもち、詞型は七七七七調などとされ、七七七七調となって叙事型式ともいえよう。

全国に残る「土突き唄」(胴突き唄・  
土掻き唄・地掻き唄など)の類は、引

地業唄と殆んど同型で、これらは仙台唄の船下し唄にも同様な詞型がみられる。

また各地の龜の子土撻みに用いた、「松前音頭」の数え唄と同一の歌詞もあり、岩手郡下閉伊郡大村崎地方の「崎暮木音頭」も同じ文句がある。やはり音頭系の数え唄で単句の唄と、テンポの早い切れのよい拍の強い囃子調が特徴である。

夫もみんなで考え出していただきた  
れ。かつての実態に近づけるよう工  
業化まつりや噴泉会<sup>1</sup>では、毎年、渡  
演している。現在石巻市民芸術祭などに出  
りや受声の唱和も堂々たる風格があり、  
祝い歌に似た雰囲気をもって、唱歌は洗

練されている。  
この「つばうち唄」は地域の無形民俗文化財として伝承保護の要ありと思われ  
る。

昭和二七年九月四日、日本放送協会電臺中央放送局武田忠一館長は電臺に就任し、探講をついている。昭和五年三月、石巻市篠本晶氏により、市内流落在住高橋常助氏（一九〇三年生）の音頭によるカセットテープ録音および探講がさされている。平成元年一月、也元有志（七名）

よって、「つぼうち喉保存会」が結成された。現在の演唱は殆んどステージに依つて、そのものとなり、音頭取りの人が「アウ」を持つて中央現場に立ち、その後方に一列に受声の人たち（○数人が同様の長柄の「アウ」を持つて並び、一齊に床を打つて拍子を採り唱和する。

「アウ」の床を打つ音が拍の強弱をハキリさせ、勇ましく現実に感じさせる。彼らは実際も眼の芸能でも現実にいるが、も少し芸能的な自由な表現による唄い回しどと、唄の拍子にも緩急があつたような気がする。やわらかい歌詞をも入れたりし、その類の唄のときなどでは、後方の手提のたちも床でも手になつたり、短かい手提の「アウ」でも手にして床を叩き音和したりするのも一興とも考へ

南境

その家の孫出生を祝す「お七夜振舞」  
（孫振舞ともいう）座敷の宴席は、俗に「お七夜振舞」ともいふ。もと「ほだて」ともいふ。と聞いたが、土地によつては二の膳のことだともいふ。「お七夜

平成元年一二月、地元有志一七名によって、「つぼうち唄保存会」が結成された。現在の演唱は殆んどステージに

「アウ」を持つて中央正面に立た、その後、「アウ」を持った一列に立た。その後、「アウ」を持った並びで、一齊に床を打つて拍子を採り唱和する。「アウ」の床を打つ音が拍の強弱をハッキリさせ、勇ましさを感じさせる。筆者は実際の作業も唄の芸能も実見していく

ないが、も少し気軽な自由な表現による  
唄い回しどと、唄の拍子にも緩急がある  
たような気がする。やわらかい歌詞をも  
入れたりし、その頬の唄のときなどでは  
後方の受声の人たちは円座にでもなった  
り、短かい手櫛の「アウ」でも手にして

仲人夫婦、嫁の実家の両親が座り、親戚知人などが招ばれる。

ちが次々に繰り出して座興の宴は盛り上がる。

孫を抱いた婚家の母（姑）が、仲人母に手渡し、しばし抱いたのちに嫁の母に渡す。そのとき歌の上手な女の人が孫舞唄を唄い出し、他の人もそれに和し、唄の拍子について即興風な喜びの所作振り

をして、孫をいつくしみあやすよう、多少滑稽気味な振りをも混じえて、興が乗つてくれば座敷の真中に出て踊り出す。そして終盤頃合いをみて嫁家の母に丁重

に渡す。というのが一応の孫抱きの基本型のようのみられるが、孫抱きが時間的に長くなったり、振りが多少遅っぽくなるのを心配して早々と次に回すこともある。あつたり、座に連なったみんなで抱き回すなどということもあった。孫抱きには男の方から贈られた着物を着せられたことがあるが、「掛け衣裳」といって、新調の晴れ着を赤児の手を通さずに羽織らせたまま抱きかかえたものである。

南境の孫舞では、孫を回し抱きする前に、実家の母から孫への贈り物に主として衣類が入った手行李を抱えたり、肩に抱いたりして頭に入れたままながら、家に連らなかった人々に披露をしてから、孫を抱いての踊りに入っている。

というのも実は旋律のない、唄といえな  
いような囁子言葉がリズミカルに述べら  
れるもので、一応の詞章は作られてはい  
るが、実際上は即興的でいいもので、孫  
舞にふさわしい文句を状況に応じて唱い  
囁されるのである。

かしながら、面白おかしく口調で唱えたりしながら、周囲の人たちは浮々と手を打つたりしながら、ときには唱和をして出し、周囲の人たちはまた浮々と手を打つたりしながら、物真似の手振りなど、座舞は物真似の手振りをすると、大黒天舞、杓子舞、天保舞、竹の子舞、お詫び差し舞などを、座敷での宴席に座興とすることが多い。現在でも登米郡山田町浅茂地区は一種ほどの囃子舞が古懶の影響として伝えられている。囃子舞には地方的な色合いもあり、時代色や地芝居風なものも取入れて編み出した人もあり、その人に、本吉郡横山町の音野舞といふ名人がいた。こうした囃子舞は容易に知れる。この流れは南境での詞章の唱え方も同型で、文句をたたみかけるように「声高に唱えるもの」で、詞章の継ぎ声個所に「ソラ」「ボレ」「コラ」「ホラ」とかの掛け声が入ることもある。豊楽の座席からは拍子に合わせて「スサ・スサ・スサ・スサヨー」となどの掛け声も入る。《スサ》は「久」か「寿」か、こうした掛け声は中田町辺の囃子舞にも掛けられていて、いずれも系統の囃子舞として影響があつたものとみられる。

並べてたてていれ、南座で踊られた、年子舞の原型のとみられる。我が国では、年子舞が開いたときには、「目出度い歌や言葉が掛けられれば、その言書きの如くに、佳いことが続き、物事の成就ができる」という根強しい信仰があつたから、孫振舞の座もよい興が乗り、唄も踊りも自由に無礼講が続けられた。

昭和四〇年頃から、実態としては中絶されていた南境孫舞は、南境地区の婦人グループの手により、「南境新孫舞」として復活の気運が盛り上がり、昭和六年一月五日の石巻市民演会にて復興された。孫老会のステージで復興上演がされた。本来、ステージ等に上るほどの芸能とは程遠いので、唐桑町小鶴の神止七福神舞の芸想を取り入れ、装束や舞振りなどに新たに工夫を凝らしたもので、派手な大振りなステージなどで大衆の前にて行う演目としての新孫舞なるものは、如何によん編み演出されてもいいだろが、実際の南境地区に出生した孫たちを祝う振舞座敷における「孫舞」は、単純素朴な南境の伝統の習俗であり、後代に伝えてもらいたい詞頭に唱える言葉の或よりも、重視してほしい氣がある。

「本吉神樂」とか浜神樂と呼はれた系譜沢町から宮城県登米郡にかけた地域に伝播していた系譜の二系統が伝えられ、村々の鎮守の祭りに仮設の舞台を作り、近くの神職（法印）たちで一団の神楽組を編んで、神話の演目を長時間毎晩舞ってきたが、格調が高いにも拘らず平易で娛樂性もある法印神樂は地方の民衆たちの御湯御囁歌を得て土地の祭礼に欠かせない芸能として定着していた。石巻にも宮城県指定の無形民俗文化財の牡鹿法印神樂があり、地域の各神社例祭に招ぼれたりして深く親しまれてきた。

小竹浜にももとは牧山の神楽組とは別に法印神樂があつたというが、小竹浜には南部神樂も行われたが、いまはどちらも廃絶。

神樂は旧藩時代までは、修験とか神職以外に舞うことは禁じられており、一般民衆の神樂好きの者は蔭にかくれて法印神樂の真似などをしていたらしい。

確証は得られないが、早くみても化政期（一八〇四～一八二九）のころ、大略西磐井郡の一関辺において、浜神樂と同様の法印神樂が行われていたものを基にして、さらに早池峯山麓を中心には分布された修験の山伏神樂の芸態をも取り込んで、奥澤瑞穂の説話や神話などをストーリーとした料白（コワ）という劇の農民神樂が編み出されたよう云能化し、忽ちにして仙台領内の北部地帯に伝播し大流行をしたが、その影響で、從来行われていた修験の神樂が廃退して、新しい民衆神樂

は、地域の神社は「南部神樂」と呼ばれて、地元の神社の附屬神樂となつたものである。宮県県内においては明治二三年頃から明治一七、八年ころ、栗原・登米両郡を主として、南は仙台の近くまで、海岸地帯は氣仙沼、唐桑から三陸一帯をも含むる。石巻から南三陸一帯の高屋敷、小竹浜、そして小竹浜に伝わり盛行していった。石巻・牡鹿・桃生・氣仙沼・本吉の海浜地帯に確認できた南部神樂組は二九ヶ所に及んでいる。

これら南部神樂は元は地域の神社とは直接に関係していなければないが、神樂演舞を行なうに最も適うのは春秋の各神社例祭であつたから、地元鎮守は申すに及ばず、近隣の神社祭礼の催物として南部神樂は欠かせなくなつて、神樂組によつてながら七三ミプロ的な芸能團と化したものもあつた。

小竹の神樂はこの南部神樂であるが、その初りについては、元気浜公民館長で小竹神樂を育成され、自ら笛の担い手となりた佐藤精一氏によれば元治元年（一八六四）生れの某女が一才のとき、小竹浜に大火があり、軒並み新築を余儀なくされ、その建築に氣仙沼工が招ぼられ、長期の滞在をしていたが、その大工が神樂達者であり、浜の男たちに神樂を教えたのが初まりと、いうから、それは数えて明治一三年（一八七〇）ころだつたことになる。當時とすれば南部神樂が県内に流傳した最も早い時期とも考えられる。口伝に「小竹神樂は南部神樂の崩し神樂だ」といわれる

が、実は南部神楽本流と言われる流派でも歳月が経、師匠が変わればな崩しなのである。

明治一四年に薩摩の萩浜が三菱汽船会社（日本郵船）の寄港地となる。会社などの行事や催しに小積神楽がしばしば演じられたりしていたが、さすがに戦中戦後は中止の止むなきに至っていた。

昭和二四年に小積の主婦たちが神楽の復活を試み、伝承者であった男たちから指導を得ていた。昭和二九年の萩浜小学校の運動会でのアトラクションに出場した元の人々をアーチウェー、見事に復元を遂げることができた。当時、女性が神樂を舞うなどということは考えられもしなかつたことで、小積浜の女人たちの進歩的な行動は大きな反響を呼んだ。時には胴取（大太鼓打で全体の指揮をする）も女性によつて行い、金員が女性の手によつて演じられた。小積の女神樂と報じられ、藤では「ガガコ神樂」「ババチヤン神樂」「ババコ神樂」と愛称されて、遠くからも声が掛かってきただ。

そのうち昭和四年に胴取の女人たちが故人となり、胴は市役所の阿部謙三氏に代り、前記佐藤精一氏が笛を担当し、舞の指導と全般の面倒も見るといふことになる。

昭和四三年石巻市漁協婦人部大会が市民会館で行われた折、小積神樂が出演、さらには昭和五〇年一月一日同じ石巻市民会館にて第五回宮城県民祭芸能大会、に出演したころが平均年令六五歳という、全国でも稀少の女神樂の全盛期だったかも知れない。

今般の現地調査により当時の演舞者たち五人が健存していたが精古不足は否めず、伝承は稀薄となっていた。しかし新しい後継者の主婦たちも歎かわつて、なし、胴と笛の男性指導者の協力次第で、は往時の時代を取り戻せるものと感じた。

昭和五〇年の練習風景収録のものと感じた。セッテーピーが市教委より送付され聴取して驚いた。内容は、「三番叟」と「天の岩戸開き」でもらった音声のみであるが、予想していた以上に演唱は洗練されており、金体の空気感に満ちた演出が情熱を感じられた。特に掛け唄・寄せ唄とも称す神樂せり眼や、神歌には女性たちの声が唱和されていて、まとまりが良く、

「天の岩戸」のそれぞれの神々に扮して名乗りをする場面では、「口話」と呼ばれる料白回しが、音程も声質も極めてよく、今回の調査でも一面のみを見せてもらつたが、女神樂の場合も、特に式舞をする舞人は直面（素面）の方が似つかわしいようだ。小積では神樂唄を唱う

場合は、胴取が唱えるばかりでなく、特に唄い手として二人位を胴前（囃子方）に並ばせたことなどが、他にはみられない事例たどりた。

高齢者の場合の生きがい対策上も、この実見できなかつたが、よくやつていているという印象であった。女人であるから女性が遺伝とは決していい。むしろ、女の人の神樂演舞には部の人を除いて概して稚拙さが目立つものであるが、舞振りは

場合、胴取が唱えるばかりでなく、特に唄い手として二人位を胴前（囃子方）に並ばせたことなどが、他にはみられない事例たどりた。

小積の神樂のようないなり方は、地域伝統文化の伝承育成とともに、さらには小集落などのコミュニティ活動などに大きな効果が期待できる。

演目との遊び、劇舞の演出出技等に女性の神樂のようないなり方、舞振りは、それほど風流化が進んではいるようと思われる。

渡波の獅子振りを、風流に置き換えているのは、楽曲と奏法の、獅子舞に付いた離子などの方で、獅子舞の姿形や舞振りは、それほど風流化が進んではいるようと思われる。

渡波の獅子振りを、風流に置き換えていた意図には、渡波独特の芸風を特長づけて凝った名称にして、一種の魅づけなものとも考えられる。昭和二九年以降、約四〇年近くもこの芸能が、「獅子風流」として、この地域に定着し、石巻城外にも滲透しつつあることからすれば、この特長的な名稱の付け方も批判的対象とするには当らないと思われる。

「獅子風流」は、他では「獅子まわし」と評称していた。獅子頭を振り舞う、獅子舞の意である。昭和二九年に渡波獅子

神樂や山伏神樂を源流とするだけ、やはり笛が付いていたはずと思われるが、現型の南部神樂の大半は、すべて強烈な大型の太鼓と銅鉦子の、耳をつくさんくはかりのリズム音のみで演じる。コワの旋律をなぞる曲調ばかりではない笛の旋律をも研究されて、小積持楽ではないかといつて、セッテーピーが市教委より送付され聴取して驚いた。内容は、「三番叟」と「天の岩戸開き」でもらった音声のみであるが、予想していた以上に洗練されており、金体の空気感に満ちた演出が情熱を感じられた。特に掛け唄・寄せ唄とも称す神樂せり眼や、神歌には女性たちの声が唱和されていて、まとまりが良く、

はよくなく、今回の調査でも一面のみを見せてもらつたが、女神樂の場合も、特に式舞をする舞人は直面（素面）の方が似つかわしいようだ。小積では神樂唄を唱う場合は、胴取が唱えるばかりでなく、特に唄い手として二人位を胴前（囃子方）に並ばせたことなどが、他にはみられない事例たどりた。

芸能は時代の変遷とともに華麗に芸能化し、且つ風流化してきたものであるから、獅子舞も多少風流化しているともいえよう。しかし風流にいえば、風流化しているのは、楽曲と奏法の、獅子舞に付いた離子などの方で、獅子舞の姿形や舞振りは、それほど風流化が進んではいるようと思われる。

渡波の獅子振りを、風流に置き換えていた意図には、渡波独特の芸風を特長づけて凝った名称にして、一種の魅づけのものとも考えられる。昭和二九年以降、約四〇年近くもこの芸能が、「獅子風流」として、この地域に定着し、石巻城外にも滲透しつつあることからすれば、この特長的な名稱の付け方も批判的対象とするには当らないと思われる。

「獅子風流」は他では「獅子まわし」と評称していた。獅子頭を振り舞う、獅子舞の意である。昭和二九年に渡波獅子

### 渡波獅子風流

一、名 称

渡波獅子風流は、もと「獅子振り」と評称していた。獅子頭を振り舞う、獅子舞の意である。昭和二九年に渡波獅子

子舞の意である。昭和二九年に渡波獅子風流保存会を結成するに当たり、初代会長としている地方も多い。一般的には全国的



歌子（田打明）一人、すり鉢二人、  
他に囃子詞（掛け声）の役を付けること  
もとほもつと大規模な構成をもち、太鼓  
太鼓も数基、笛も四、五人、獅子は黒（牡）  
赤（牝）の二頭立てでやつたともいわね  
る。

「道廢子」(しじこ) 田打明(前略)  
本明、「四方警め」「火あらせ」(あらせ)  
その一、「岩頭の結び」(ゆうび) 田打明(後略)  
万起鶴子「萬崎」(ゆうさき) 田打明(後略)  
明、「おくり廢子」(しじろ) の顛と名  
各獣子風流祖は以上の芸を演ずる場所  
等に応じて、多少の省略等をすることある。

以下の芸想を考察を付して記してみる。道中は、家毎に巡回するときは行列を仕立てる。その順序は特に定まつては

にしかるべき方を先ににするか、猶豫つかないか、立てるようである。行列はできるだけ静かである。然とし、楽器を奏しない者も雑談を避け、喧嘩等もすべきでない。もとは囃子方の禮儀であるが、太鼓は鼓打いだが、その後荷車、運び手はヤカーに積み置き、打ちなおす。そこで笛や笙はそれの間に付くのが正である。笛や笙はその間に付くのが正である。道中はその昔、太神樂（代神樂）の神符を配り、伊勢守宮の御子舞が、伊勢守宮の神符を配り、御子舞が歩いた名残りともいえよう。正丘山門付けに歩いた御子舞もみられる。いずれもこの海浜の春祈祓である。定着し、家々を回ることが重要な行事であるから、その過程として自然と行うことが望ましい。道中囃子は行進曲といふ

空腹を整えるに役立ち、長時間にわたったところ、空腹となるから道中対にして疲労も重なり歌ともなつたわけのもので、次の旅宿への予告にもなる意義をもつ。『しきろ』という曲は、古くから岩手県南の囃子の源流ともされ、また、大船渡市末崎囃子の代表曲でもあり、宮城県の打囃子にも多く演奏されている普遍的な曲調であり、一説では古武士の鏡の鏡に由来する曲ともいわれる。栗原町岩崎ヶ崎では「袖功老」と書き、土地により「すころ」「ひこう」といっており、勇壮で軽快、ゆっくり鳴るのもとても元気十分の「田打唄」である。もともと親しみやすい曲である。

道中の組が門口に到着し、鬱子が座敷を上る前に、歌の上手な歌子によって「田打唄」が唄われる。從来「なんぶ」と書いて、「丹舞琴」などとあるが、まぎれもなく「田打唄」である。もともと小正月に行われる門打ちの芸能は、農耕、それも稲作富穫を予祝するもので、各地で田植舞が小正月に踊られてきたことと符合する。県内でも大抵の土地で「かせどり」と「せどり」とか「ちやせせ」という行事で、田打唄の曲を唄うことが多かった。本来特に讃め歌をどうぞ唄いて予祝するところでも行ってきた小正月の行事である。栗原地方などから大勢で遠くの町々に移り出して、「田打唄」を掛けで歩き、餅菓子を貰つたことをもつた。本来は正月の二一日の「農はだて」(農初め)において、ほんの儀札的な田打ちの作業事をして唄われたものらしいが、それが渡波地域で勁風、嵐に付いて唄われていつ

たが、これは「火伏せ」すなわち火魔防除の頭を唱いでいる。茶の間に至るまでの家族をさきだす。やまとに口を近づけて息を吹き掛けたり、水がめ（いまでは水道）にも同じことをする場合もよくみられる。茶の間に大きく頭を回しつゝ、後ざりして座敷へ下り、縁側に入つて舞子は交代する。曲は急テンポの連舞に変り、「あら」となる。先づ「岩頭の舞」というのだぞうだ。獅子頭も帷幕もゆれが激しくなり急調だ。頃合いを計つて前者が後の者にの上に乗る形となる。あとで聴くと、前の者の腰には丈夫な柔軟性があるのだそうだ。獅子頭は高く、ぐんと座敷の梁のところまで上がり、高所から遠くを望むようなしぐさとなる。「岩頭の舞」というように、海上を高い岩頭から眺め渡し、大漁を祈り、海難を祓う舞なのだろう。他の獅子舞組ではなこうとした舞を「經ぎ舞」とか「二階獅子」とかいう。その体型のまま獅子頭を床につけるようになると、その所作は頭の者の背筋を返していくのこと、荒い息づかいで聞こえるようだ。振り定型の一人立ちはなしとなり、右足に頭を振り脚を踏んで引張り力強しい舞型をしてみせ、そのまま、ずさりとして交代した。

な頭のあつつかいは、獅子の獸性をみせてゐる。観幕の脇を聴き、大口を闊て開いて右から左へと大きなあくびがされ、少しづつ体を起こしはじめ、静かな動きに後ずさりして下がる。

この獅子風流の通常の特長的な体型は、頭は丸みを帯びて、赤頭を使用しているが唐突ゆるやかな斜度で尻尾となり、尻尾の方のがいつも高く、床からの距離が殆んど要らない。白い尻尾の毛は豊かで、長さは一尺五寸（四五センチ）ほどもある。うか、獅子頭は赤頭を使用しているが唐突付を置いて、古道具店などにいつでも見つかる。も転がつてそのまま型にみられるのは惜しい。もっと獨特な面立てをしてした獅子頭が古くからあったのではないかたか。いつの頃からか、この地方の獅子頭のほとんどの頬から頬まで、頭の裏まで模様になつたのか。観幕（頭顎ともいう）の頬は、毎月、日月に満巻毛が散らばるものが用いられ、これも特徴的でない。東北海浜部地帶の獅子舞の地方的な特性を薄くした原因は何なんだったのだろう。

さて、最後の獅子振りは「結び」といっている。直後の獅子振りは「結び」といって激しくしている。何かに憑かれたようにもみえ、最後のあがきともされる。緩急ある踏み足がしつかりしていく。さすがにこの地方の、技術的な芸能としての伝統的な確かさと、技術の修熟による巧みなが確実に感じられる。曲は「後壁子」前壁者と後壁者の間で観幕にまわって同時にぐるぐると転がる。転がった先から再び転がりまわって起き上った。これをと

「なんば返し」と呼んでいた。一舞して後ずさりで下がり、「田打唄」の囃子に変わり歌子は「田打唄」の「後唄」に入る。  
「ヤヨー　おいとま申すぞヨ  
ご縁があるならば（囃子詞入る）  
来春また来るぞ　ヤヨー

中の中のときの「しころ」の調子になるが、リズムが早くなってきた。囃子方の勢いが一段と盛り高くなってきた。太鼓打ちは一段、桴を持ち直して力を込め、太太鼓と小太鼓を並べておき、ひとりで「合わせ太鼓」として打ち叩く。これは「送り太鼓」とも呼んでいた。太鼓の曲打ち風、打ち分けの元は、渡戸鶴子風流の演技が聞かせどころとなっている。約一分三〇秒止み、鶴子風流の演技は終つた。引継ぎつぎの家の間じように練返されてゆく。

七、扮装と楽器

芸場に書き込みなかつた装束と囃子に用いた樂器について述べる。

渡戸鶴子風流保存会の演者たちは、一様に頭に豆紋入りの手拭いで鉢巻きをし、紺の腹掛けに股引、白緒の草履をつっかけている。みだらな濃紺の名入法被を羽織っている。右襟には左襟に「石巻市民俗文化財」右襟には左襟に「石巻市風流保存会」と染抜き、背紋に大きく白抜き泰文字にて「鶴子」とある。以前、歌子などは着長してやっていたことがあり、その方が

古懸であるが、どこでも装束東にハッピが用いられ、江戸風な形が祭り風の形となってしまったのも時流といふものか。なお左様の文字は「石巻市無形民俗文化財」が正し。

太鼓は鼓面直径一尺六寸(四八・五センチ)の派列抜き長胴太鼓(俗に宮太鼓)を用い、小太鼓は普通の綿太鼓を赤緒で締めている。太鼓は大小とも少し斜に鼓面を上にして太桴一本をもつて打つ。小太鼓は小さきのみのリズムを基調として、太鼓は小太鼓のリズムと笛の五音に乗って拍を打つ。笛は六孔の市販の五号笛苗を吹奏する延ばすりがね(俗にチャンギリ)といふ。内径を打つ。

なお、渡波獅子風流は現在「獅子あやし」が付かないが、あまり古くない時代には付いていたともいわれ、検討を要する。「あやし」(愛子とも書く)は「獅子まねき」などともいわれ、大抵は獅子頭にあやし一人付き、火男面などを冠り、手に御幣とか扇、錫杖などを持つて獅子を先導し、發揮させ、動きをおさえたり、獅子の動作をあやつる。殆んどは道化役とするが、あやし役の巧拙や動作により獅子の演技も大きく左右されるものである。

八、伝承形態と育成

戦前の獅子振り出演者は地域の若者たちから選ばれ、名譽とされ、成人儀礼とともに養育され、成人儀礼と育成された。若者たちは自宅から離れた行屋に籠つて、約七日間宿泊し稽古に励んでいたといふ。これが若者たちの交流を生み、深齊ともなっていた。

渡波獅子風流保存会(会長阿部慶志氏)は曾頭に記したとおり、当時の民俗芸能

団体としては最も早い時期であった昭和二九年に既に組織を確立しており、後継者の育成と無形民俗文化財としての保存を旨としていた。一般的の保存団体と異なるのは、傘下に多くの実保保存会員組織を抱え、その指導者たちが保存会員と共に活動することで、このような保存会は、登米町の「とよま獅子保存会」(一六・七団体をまとめている)以外には、その例をみない。

昭和五六年一二月一九日付、石巻市無形民俗文化財に指定された。

### 鹿島御兒神社・神輿納め唄

三河に生れ秋田に住し、諸国特に東北の各地を旅して親しく民俗に接し、詳細なる記録を記述し続けた、著名なる菅原真澄は、明治六年(一七八六)八月十四日夜は佐藤暉道の家に泊り、翌十五日の夜はから蛇田を纏て石巻に入った。その夜には佐藤暉道の家に泊り、翌十五日の日記には「ほくろの神にままで奉る。是なる鳥星神社にておましませり、又零羊

日和山から蛇田を纏て石巻に入った。その前に道の両側に粘土の壁を張り巡らすことはもちろん、毎戸は朝方に神輿の渡御に当り、行列を迎える沿道の氏子の家々では、道の両側に縄を張りて上げなくてはならず、厳しく珍しい祭儀となっている。

神輿の渡御に当り、行列を迎える沿道の氏子の家々では、道の両側に縄を張り巡らすことはもちろん、毎戸は朝方に日和山から蛇田を纏て石巻に入った。その前に道の両側に粘土の壁を張りて、両側に曳き上げられた神輿は、奥の鳥崎の神は真野のむらといふとへは、今は魔鬼てふ山のいた、きにあがめて、山おしは道化役とするが、あやし役の巧拙や動作により獅子の演技も大きく左右されるものである。

八、伝承形態と育成

戦前の獅子振り出演者は地域の若者たちから選ばれ、名譽とされ、成人儀礼とともに養育され、成人儀礼と育成された。若者たちは自宅から離れた行屋に籠つて、約七日間宿泊し稽古に励んでいたといふ。これが若者たちの交流を生み、深齊ともなっていた。

渡波獅子風流保存会(会長阿部慶志氏)は曾頭に記したとおり、当時の民俗芸能

として、午前一〇時には子供神輿が、引綱にて午前一〇時三〇分に大神輿が出御され、氏子町内を神幸されるのが例となる。もとはその行列の途次、防潮堤にて神輿は重量が三百貫(一、一二五キロ)もあり、庚子の供奉人は三十七、八人にによって昇がれるが、三交代で百人以上の要員に上る。現在は船型の台車に乗せられて神幸されるが、神社へ遷御の際は石塹がつき、昇る者と、梯子を結びて上方に曳き上げる者とをもって拝殿前まで上げなくてはならず、厳しく珍しい祭儀となっている。

神輿の渡御に当り、行列を迎える沿道の氏子の家々では、道の両側に縄を張り巡らすことはもちろん、毎戸は朝方に日和山から蛇田を纏て石巻に入った。その前に道の両側に粘土の壁を張りて、両側に曳き上げられた神輿は、奥の鳥崎の神は真野のむらといふとへは、今は魔鬼てふ山のいた、きにあがめて、山おしは道化役とするが、あやし役の巧拙や動作により獅子の演技も大きく左右されるものである。

八、伝承形態と育成

戦前の獅子振り出演者は地域の若者たちから選ばれ、名譽とされ、成人儀礼とともに養育され、成人儀礼と育成された。若者たちは自宅から離れた行屋に籠つて、約七日間宿泊し稽古に励んでいたといふ。これが若者たちの交流を生み、深齊ともなっていた。

渡波獅子風流保存会(会長阿部慶志氏)は曾頭に記したとおり、当時の民俗芸能

工一 御祝いに枝も ハエ一イ  
柴ゆるノ一 エンコノ一

葉も 繁ん

として、午前一〇時には子供神輿が、引綱にて午前一〇時三〇分に大神輿が出御され、氏子町内を神幸されるのが例となる。もとはその行列の途次、防潮堤にて神輿は重量が三百貫(一、一二五キロ)があり、庚子の供奉人は三十七、八人にによって昇がれるが、三交代で百人以上の要員に上る。現在は船型の台車に乗せられて神幸されるが、神社へ遷御の際は石塹がつき、昇る者と、梯子を結びて上方に曳き上げる者とをもって拝殿前まで上げなくてはならず、厳しく珍しい祭儀となっている。

神輿の渡御に当り、行列を迎える沿道の氏子の家々では、道の両側に縄を張り巡らすことはもちろん、毎戸は朝方に日和山から蛇田を纏て石巻に入った。その前に道の両側に粘土の壁を張りて、両側に曳き上げられた神輿は、奥の鳥崎の神は真野のむらといふとへは、今は魔鬼てふ山のいた、きにあがめて、山おしは道化役とするが、あやし役の巧拙や動作により獅子の演技も大きく左右されるものである。

八、伝承形態と育成

戦前の獅子振り出演者は地域の若者たちから選ばれ、名譽とされ、成人儀礼とともに養育され、成人儀礼と育成された。若者たちは自宅から離れた行屋に籠つて、約七日間宿泊し稽古に励んでいたといふ。これが若者たちの交流を生み、深齊ともなっていた。

渡波獅子風流保存会(会長阿部慶志氏)は曾頭に記したとおり、当時の民俗芸能

として、午前一〇時には子供神輿が、引綱にて午前一〇時三〇分に大神輿が出御され、氏子町内を神幸されるのが例となる。もとはその行列の途次、防潮堤にて神輿は重量が三百貫(一、一二五キロ)があり、庚子の供奉人は三十七、八人にによって昇がれるが、三交代で百人以上の要員に上る。現在は船型の台車に乗せられて神幸されるが、神社へ遷御の際は石塹がつき、昇る者と、梯子を結びて上方に曳き上げる者とをもって拝殿前まで上げなくてはならず、厳しく珍しい祭儀となっている。

神輿の渡御に当り、行列を迎える沿道の氏子の家々では、道の両側に縄を張り巡らすことはもちろん、毎戸は朝方に日和山から蛇田を纏て石巻に入った。その前に道の両側に粘土の壁を張りて、両側に曳き上げられた神輿は、奥の鳥崎の神は真野のむらといふとへは、今は魔鬼てふ山のいた、きにあがめて、山おしは道化役とするが、あやし役の巧拙や動作により獅子の演技も大きく左右されるものである。

八、伝承形態と育成

戦前の獅子振り出演者は地域の若者たちから選ばれ、名譽とされ、成人儀礼とともに養育され、成人儀礼と育成された。若者たちは自宅から離れた行屋に籠つて、約七日間宿泊し稽古に励んでいたといふ。これが若者たちの交流を生み、深齊ともなっていた。

渡波獅子風流保存会(会長阿部慶志氏)は曾頭に記したとおり、当時の民俗芸能

いう。その造船技術者の育成に当つて、常に習得されたのが、明石藩の御船歌であつたと伝えている。なお、石巻御船歌は、豊太閤による朝鮮侵攻の折りに、政宗公が瀬戸内海において軍船を建造したときには歌われたものとの説がある。

「御船歌」といわれるものは、単に舟唄(船唄)といふ船漕唄などの労働の唄ではなく、船に関する儀式とか祭礼、例えば将軍家、公卿、大名たちの乗船に際したときとか、官船の起工式、進水式などにも唄われた一種の祝い唄であり、船靈祭のときも、大名たちの船遊びにも唄われるものとのされる全国の各地にも「御船歌」の幾つかが伝承している。

中村氏により指導された「御船歌」はその子弟たち造船技術関係者によって伝承されたが、この唄は父祖代々、中瀬の村上造船所で働く、主として門脇在住の船大工たちにより繼承され、造船所における新造船進水式などの祝い唄は、何時のころからか、宴が閉じられる頃合に、棟梁など年高の上座から唄い出される慣習となってきた。この唄が出来れば、いかに席が乱れていようと、いかなる筋筋者も、きちんと正座をし、盃を伏せて飲酒を止め、儀式を正す。唄い出しの人は歌詞の一番と二番の第一節まで独り唄い、その後は唄和がされる。この唄が演唱されることは宴の終結を意味し、何人といえども盃を手にすることはできないといふ不文律があつて、この慣行は長年にわたり守られてきたといわれる。

この御船歌がのちに鹿島御兒神社の神輿納めに際して、門脇の氏子たちにより祭典の日は神輿納めにより解散をしたが、翌日の午後は直会(庭園め)といつた

唄われ初めたものか、あるいはもともと古くから鹿島御兒神社に繼承されたたるものか、などを確認を得ることはできなない。一説にはもと日和山の南麓にあった社殿を現在地に造営遷宮された享保十九年(一七三四)以降、神社に発生されたともいわれ、また明治二十年から三十年代にかけて門脇の氏子たちにより神輿納めとして移ったとの説も有力である。この神社の氏子總代であり、村上造船所の家系者で永年勤続され役員であった、中村右衛門により相伝された村上造船所関係者の氏子たちによって、鹿島御兒神社の神輿納め唄として転用されたものと考察せざるを得ない。

この歌の歌詞の内容は、御船歌としてふさわしい詞章も入った正月の祝い唄である。歌詞と曲調の格調は厳正な宴唱歌として唱出される肅然たる雰囲気である。宴席の亂れを正してきた慣行とともに、造船業者として、また鹿島御兒神社氏子としての地縁的、同業者の結合となつて大きな誇りとなつたわけであろうし、地域的な良俗としても伝承すべきものである。

この「御船歌」はこれまで、通常二番の歌詞まで唄われていて、三番の歌詞までは続かなかつたといわれる。一番の歌詞は、「岩手県紫波郡都南地方で唄われた『乙部御祝い』や春巻市笠間地方の『ご祝い』に相似しているところがあり、「二番の歌詞は、亘理郡山田町山下地城から県下に分布した『えんころ節』の歌詞と同様のこところがあり、小異はある。さすがに社重嚴肅な気分にさせられり」といふ。この御船歌だった「神輿納め唄」の歌詞をぐるには、何んとしても前述した「明石藩御船歌」および、宇和島藩に伝承されていると思われる「仙台藩御船歌」の資料と、演唱の実際を収録されたカセットテープなどを入手したいと考え、兵庫県教育委員会と愛媛県教育委員会に資料等を添えて問合せたが、先に愛媛県から、のち兵庫県から結局該当のものが見当らず、伝承されないことが確

があり、もとは漁師の組は救難所にて(祭りの行列では事務所を担当)、後隊を担当した職人たちは社務所において、それぞれが分別して宴を張つて勞をねぎらつた。先陣組と後陣組とは常に競争意識の氣概を持続けてきただといわれる。

「鹿島御兒神社・神輿納め唄」は、現在全國に流布される民謡俗曲の類からみれば、相当古調を有しているとみられ、特に初春の祝い唄らしい品格をもたら、調子の流れに全くなる勢いが感じられ、壯重さがみられる。詠曲調とみられるのは古調だからで、ところどころに新しい民謡による解釈や、その他の統合でみると、中村右衛門によると相伝された村上造船所関係者の氏子たちによって、鹿島御兒神社の神輿納め唄として転用されたものと考案せざるを得ない。

この歌の歌詞の内容は、御船歌としてふさわしい詞章も入った正月の祝い唄である。歌詞と曲調の格調は厳正な宴唱歌として唱出される肅然たる雰囲気である。宴席の亂れを正してきた慣行とともに、造船業者として、また鹿島御兒神社氏子としての地縁的、同業者の結合となつて大きな誇りとなつたわけであろうし、地域的な良俗としても伝承すべきものである。

この「御船歌」だった「神輿納め唄」の歌詞をぐるには、何んとしても前述した「明石藩御船歌」および、宇和島藩に伝承されていると思われる「仙台藩御船歌」の資料と、演唱の実際を収録されたカセットテープなどを入手したいと考え、兵庫県教育委員会と愛媛県教育委員会に資料等を添えて問合せたが、先に愛媛県から、のち兵庫県から結局該当のものが見当らず、伝承されないことが確

## 平成三年度

### 新金沼遺跡埋蔵文化財発掘調査報告

#### 一、調査に至る経過

新金沼遺跡を含めた周辺地域に、多量の鉄滓が散布していることは、以前より

近い畠地から土師器片（栗開式）が発見  
知られていた。

平成元年（一九八九）、仙台湾高規格道路建設に伴う道路分布調査により、付

近の畠地から土師器片（栗開式）が発見  
され、新金沼遺跡は、福村・太田切地域を含めた地域として、改めてその範囲が設定された。

それに伴い、仙台湾高規格道路（三陸縦貫自動車道矢本・石巻・石巻北道路及び仙台東道路）建設との関わりから、当該地域内における埋蔵文化財の確認調査の必要性が生じることになった。

このため、石巻市教育委員会は、平成二年初頭より建設省仙台工事事務所、宮城県石巻土木事務所、宮城県教育委員会との協議を重ねた結果、石巻市蛇田における6地点（A-F地点、第2図参照）で事前調査を実施する運びとなり、平成三年四月よりこのための準備が開始され

小泉久美子 桑川利克  
八島寛 西條芳子  
勝又正男

#### 三、遺跡周辺の環境

新金沼遺跡の立地する蛇田地域は、標高1~2m程度の沖積地で現況は水田、宅地、もしくは畠地である。

ここより北西約2kmの地点には、奈良・平安時代の集落跡や窯跡等を検出した河南町間ノ入道跡<sup>(1)</sup>や、長者越跡<sup>(2)</sup>を残す須江丘陵がある。また、西方約2kmには矢本町赤井遺跡<sup>(3)</sup>があり、弥生・奈良・平安時代にかけての墓地、遺物が発見されている。一方、南東に広がる石巻市内でも、多くの遺跡が確認調査されている。主なものとしては、昨年発掘調査が行われた田道町遺跡A-C地点があり、古墳・奈良・平安時代の集落や建築跡等が検出されているほか、五松山洞窟<sup>(4)</sup>からは古墳時代を中心とする骨角器、金属製品および人骨等が発見されている。さらには、細井地区の丘陵地に存在する越田台遺跡の発掘調査<sup>(5)</sup>でも、柱礎と考えられるビットに伴って土器器が出土している。これら以外にも、市内を含めた周辺地域には、貝塚や簡略など遺跡が確認されており、広範な分布が認められる。

二、調査実施要項

**遺跡所在地**  
石巻市蛇田字福村南・新金沼・太田切・芋坂町

**調査対象面積**  
高規格道路アクセス道七、五八七号（うち市道分七七五号を含む）

**調査期間**  
平成三年七月五日～十一月三十日

**調査主体**  
石巻市教育委員会

**調査担当者**

石巻市教育委員会  
社会教育課文化係学芸員  
木暮亮



第1図 石巻市位置図

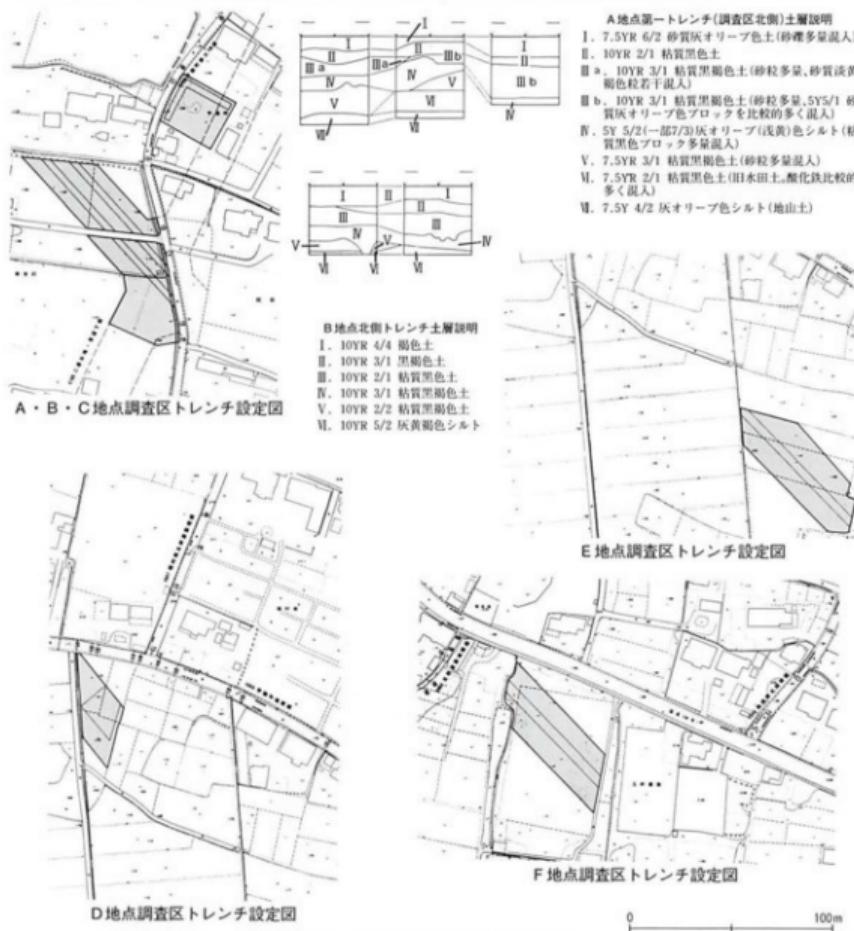


第2図 調査地点位置図

調査参加者  
相澤利喜子 佐藤ゆきの  
酒井清與 渡辺キミ子

新金沼遺跡を含め、平野部における遺跡の立地に目を向けてみた場合、それらの大部 分が沖積低地上の微高地に立地していることがわかる。

石巻平野を形成するこのような沖積地



第3図 各調査地点トレーンチ設定図

低湿地から成り立っている<sup>(5)</sup>。これは、北上川と海岸部からの土砂の堆積・浸食作用によるものと考えられ<sup>(6)</sup>、過去における人間活動に関わりあつてゐたと考えられるのである。

#### 四、調査の概要

##### A・B 地点 (第2図、第1図版)

今回の調査で最初に実施した地点であり、石巻市蛇田字太田切五九番地(一六〇番地)に位置する。

現況はゲートボール場となつており、標高は約一・八mを測る。

調査方法は、幅三mのトレーンチを設定した後、重機(バックフォー)により両

地点の表土を掘削した。

表土を約一m掘削した時点で湧水を確認し、さくら(二〇~三〇cm)の深さで地山の黄褐色シルト<sup>(6)</sup>が露呈した。

トレーンチ内は三〇cm程度で四〇cm以上の湧水が認められ、エンジンポンプをフル稼働せなければならぬ状況であり、迅速な調査が要求された。

遺構、遺物等は全く認められなかつたが、地山面より草木類と考えられる植物遺存体が微量ながら確認された。かつては低湿地であつたことが窺われる。

##### C 地点 (第2図、第1図版)

C 地点は石巻工業港曾治沖縄計画道路用地およびその隣接地分の調査として実施された。地番は石巻市蛇田字幸設町九番地、個人住宅の敷地内であり、標高は約一・七mを測る。

調査は発掘区南北方向に逆し字状のトレーンチを設定し重機による表土掘削を



A 地点



B 地点



C 地点



D 地点



D 地点



E 地点

第1回版 各調査地点発掘状況

行つた。

約1m掘り下がたところで地山の黄褐色シルトが露呈し、同時に湧水が認められた。遺構、遺物等は全く確認されていない。

D地点（第2図、第1回版）  
市道半蔵町境塚線沿いの水田に囲まれた畠地に位置し、地番は石巻市蛇田字新金沼四七〇番地で、標高は一・九mを測る。

調査区北側縁辺部に沿って、重機により幅三mのトレンチを入れたところ、湧水が認められた。しかし、調査区南側に向かって地表面の上昇が認められたため、最終的には、第3図のように掘削するに至つた。

表土の厚さは約1mで、湧水はほとんど認められない。また、遺構、遺物も皆無であった。（第1回版中には遺構らしいシミが写っているが、これらは後世に掘り込まれた用水路等の跡である。）

#### E地点（第2図、第1回版）

高規格道路アクセス道と国道一〇八号線が合流する地点付近に位置し、地番は石巻市蛇田字五軒屋敷十七番地で、標高は一・七mを測る。

調査区北側は湿地となつており、重機によりトレンチを掘削したところ多量の湧水が認められた。

表土の厚さは約1mであり、遺構、遺物は全く検出されていない。

#### F地点（第2図）

A地点の北東約一五〇mに位置し、地番は石巻市蛇田字新金沼地内にある。



## 第2回版 遺物集中地点の状況

mを測る。  
mチ子重機により掘削し、約一mの深さで地山面を露呈させたが、道構、遺物等は全く検出されなかつた。  
調査結果から  
以上のように、平成三年度の確認調査では、何ら遺構、遺物は発見する事ができなかつた。  
きなかつた。  
よまく、もはやじつ方白(二〇〇〇)、

F地点の北東約50mには、土器類の遺  
密な散布が認められている地点（第2図  
斜線部分）があり、埋蔵文化財に関する  
付近一帯の歴史は、六か所の調査を終了し  
した時点においても未だ判然としない状  
況にある。

遺跡周囲の古環境を改めて見直す必要性を示すことを要すよう。

今回の調査で重要なと考えられる問題は、新金沼遺跡を含めた周辺地域の旧地形の多くが、湧水を伴う低湿地であり、人間の居住にあまり適さないにもかかわらず、明らかなる人間の活動の痕跡と考えられる状況が確認されたことである。

当該地域におけるこのような低湿地のかつても同様な状況が現出されていたかどうかは、判然しない。周辺地域が沖積地であり、海抜も二三までの範囲にどまっていることからみても、遺跡と水との関係は切り離せないことが考えられると。(2)

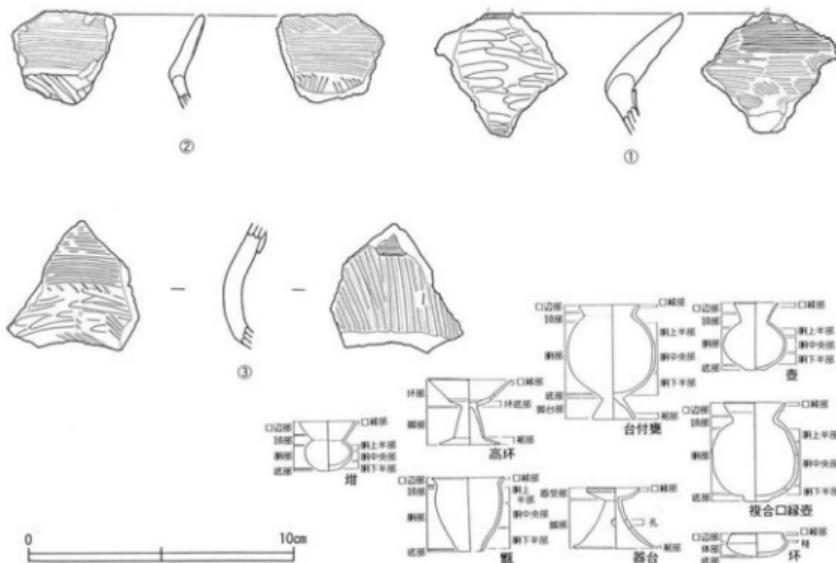
## 五、遺物集中地点の状況

新金沼遺跡における遺物の散布は国道一〇八号線（第2図右上）に沿って極めて僅かながら広範囲に散見されている。しかし、平成元年の遺跡踏査において、先見ざれい遺物集中地點（第2図左）から

らは、多量の土器片が見られた。  
この地点は現在畠地となつており、標高一・九八mを測る。(こ)より西北へ行くほど標高は高くなり、最も高いところでは二・二mを有し、この付近では最高値を測る。

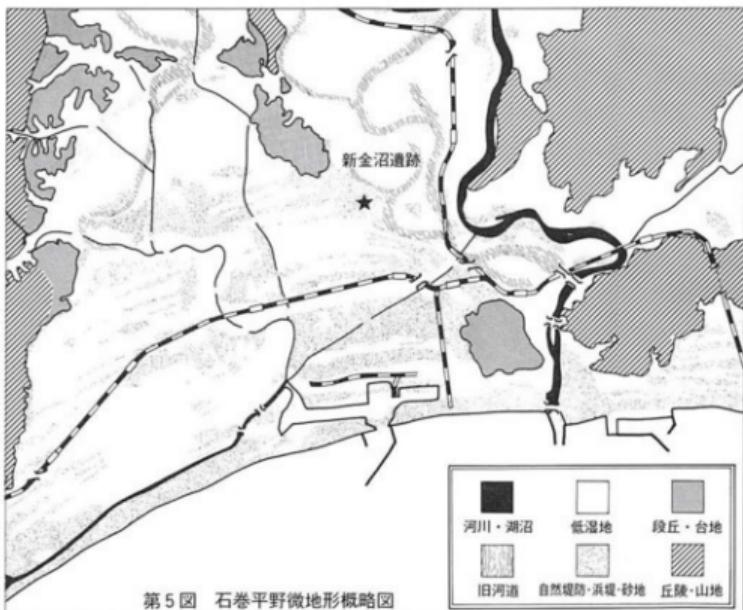
第4回に掲載した土器片は、この地点

より表掲されたものである。土師器の破片であり、復元も困難であったが、実測図を提示し、口縁部の傾斜と器面調整等により、器種を推定したものである（第4図1-3）。



第4圖 滲物集中地點土壤土器片實測圖

(玉口時雄・小金井鶴 1984「土師器・須恵器の知識」東京美術より転載)



第5図 石巻平野微地形概略図

残存は僅かであるが、頭部に貼り付けるによる突帯が残り、指頭圧痕が認められる。外側は横位のハケメ、内面はミガキが施されている。

②彫形土器の口縁部と考えられ、ナデを主体とした調整が認められるが、外面部にはミガキも認められる。

以上の破片は製作技術上から見、塙釜式である可能性が強いと考えられる。

また、この地点では、栗圓式と考えられる土器片も採集されており、当該地における古墳時代の人間活動の痕跡が窺われる。

## 六、石巻平野と遺跡とのかかわりについて

今回の発掘調査では6地点を調査したにもかかわらず、人間活動を裏付けるような遺構、遺物の発見は見いだすことはできなかった。しかし、新金沼跡地内には先に紹介したように遺物集中地點が存在しており、当該地に遺跡が実在する可能性は強いと考えられる。

石巻の平野部（特に沖積平野）には多くの道路が立地しているが、それらの立地を考えた場合、浜堤の存在は、どのように説明することができる。

内陸部の浜堤上に立地する矢本町赤井遺跡<sup>15)</sup>や小松遺跡<sup>16)</sup>からは弥生時代後期（二〇〇〇B.C.-P.C.）のものとされる土器等が出土しており、人間活動が営まれたことを示している。

③堅敏な作りの一重口縁壺と考えられる。口縁・頭部にかけての破片であり、外側は縱方向のハケメ、内面はミガキが施されている。

以上の破片は製作技術上から見、塙釜式である可能性が強いと考えられる。

また、この地点では、栗圓式と考えられる土器片も採集されており、当該地における古墳時代の人間活動の痕跡が窺われる。

**（海岸平野）** 北上川河口附近から西へ広く発達しており、牧山・鶴山・須丘陵を連ねる一帯で海岸平野との境界を成している。蛇田では、北上川の浜堤列への浸食によって、旧河道沿いに小崖が生じている。平野部では特に三・四条の浜堤帶とその間を埋める湿地帯が存在しており、特にこの浜堤帶上に遺跡の立地が認められる<sup>17)</sup>。

以上のように、石巻平野の形成は、北上川と海岸部からの相互の堆積、浸食が大きいかかわっていることがわかる。

石巻平野は約一万八千年前には一四〇m、一万年前には二〇一四〇m程現海面より低く、七千年前に同じ高さとなり、その後、数mに亘る昇降を繰り返しながら現在に至っている<sup>18)</sup>。

縄文時代中期（五〇〇〇B.C.-P.C.）-後期（四〇〇〇B.C.-P.C.）にかけての平野部は、付近に潟湖（ラグーン）を擁する遠浅泥質の海岸を望む地形であったと考えられている<sup>19)</sup>。その後、海退によつて一部が陸化し、土器製造などが行われるようになった<sup>20)</sup>。

石巻平野に農耕が行われていたことが判明しているのは古墳時代（一五〇〇B.C.）からである。前述の赤井遺跡や小松遺跡をはじめとする多くの遺跡から土器が出土しており、河南町須江櫛塚遺跡からは堅穴式住居跡群のほか、鐵製鍬等も発見されている。

立地も内陸から海岸部へと広がり、当該期には、ほぼ全ての浜堤帯において人間活動が行われていたことがわかっている。

以上のよう、石巻平野における遺跡の形成は、平野（沖積地）の成り立ちと密接に関係しているといえる。言い換えれば、土地の形成に伴って生業が拡大してきたとも言えるのである。このような意味において、石巻平野における遺跡立地の移り変わりは、すなわち石巻平野の開発の歴史と考えることも可能であろう。

ある場所に人間が何らかの活動を開始するにあたっては、その要因となるものが必要である。このような意味において、土地形成という視点もまた重要な意味をもつてくると言える。

一方、遺跡の立地と密接に関わると考えられる沖積地上の微地形は、現段階においてはあまり判然としない。また、遺跡の存在を探る上にものこのような微地形の観察が大きな意味をもつてくる。このような問題を明らかにしていくためにはやはり発掘調査を一つ一つ積み重ねて行くべきであろう。

における埋蔵文化財調査に役立てて行きたいと考えている。

説明されている。

(10) (7) 同じ  
(11) (7) 同じ  
(12) (7) 同じ  
(13) (3) 同じ  
(14) (3) 同じ  
(15) (3) 同じ  
(16) (3) 同じ  
(17) (3) 同じ  
(18) (3) 同じ

注

(1) 河南町教育委員会 一九九一「須江閑ノ入遺跡」『河南町文化財調査報告書第四集』

(2) (1) 同じ

(3) 矢本町教育委員会 一九八七「赤井遺跡第一次発掘調査報告」『矢本町文化財調査報告第一集』

(4) 石巻市教育委員会 一九八八「五松山洞窟遺跡－発掘調査報告」『石巻市文化財調査報告第三集』

(5) 木村敏郎 一九八三「越田台遺跡発掘調査報告」(1)『石巻市文化財調査報告第三号』石巻市教育委員会

(6) 宮城県企画部開発計画課 一九六六「石巻平野の地盤地質」財團法人東北経済開発センター

(7) 宮城県企画部土地対策課 一九八三「土地分類基本調査石巻・寄磯・金華山」

(8) (7) 「土地分類基本調査石巻・寄磯・金華山」に添付されている土じょう図によれば、新金沼遺跡周辺の土壤は農中粗粒灰色低地土壤に属する。

(9) 菅原祐輔 一九八八「石巻の歴史第三卷 自然編 第一章土地」石巻市史編さん委員会によれば、浜堤と海岸に平行してやや高まつた堤防状にできる砂堆（さたい）である」と

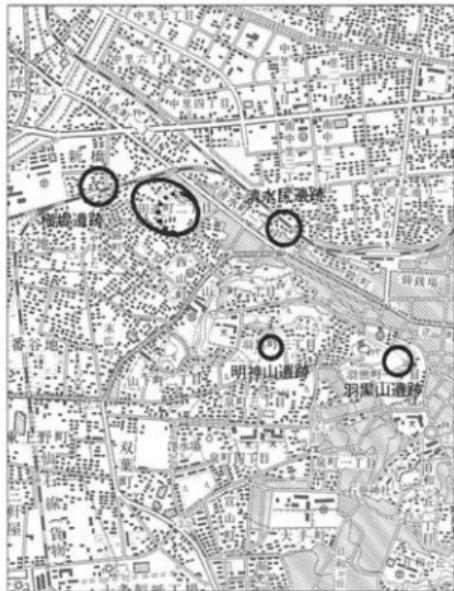
# 田道町遺跡発掘調査速報

## 石巻市教育委員会

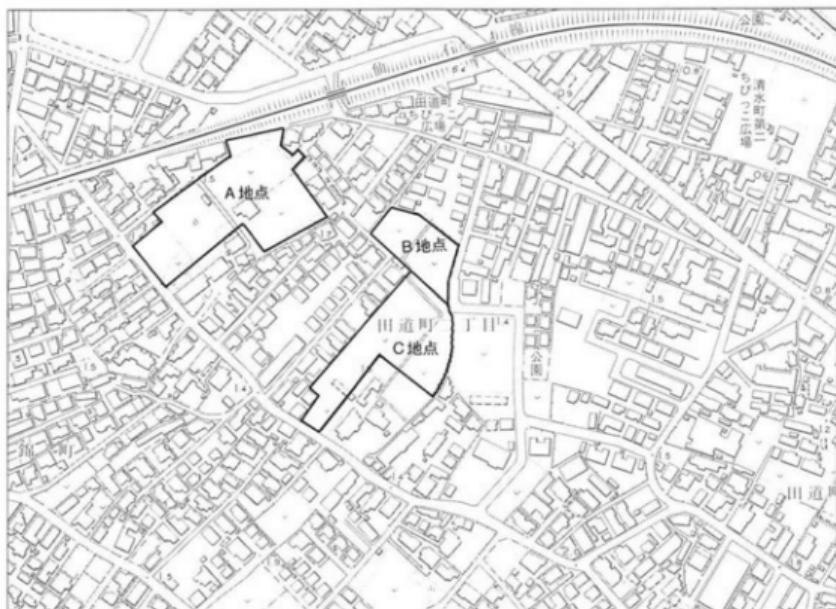
石巻市教育委員会では、平成三年四月から平成四年一月まで田道町遺跡の発掘調査を実施しました。

その結果、古墳時代前期（四世紀後半）と奈良時代の終わりから平安時代の初め（八世紀後半から九世紀前半）の二つの時期の遺構・遺物が多数出土しました。平成四年三月現在、報告書の刊行に向けて整理作業中です。以下でその発掘調査の概略を速報します。

なお、調査にあたり特段のご配慮を賜った株式会社旭薬商、石巻市農業協同組合、地主の今野勝樹氏、武内きみ子氏、調査に協力をいたいた東北歴史資料館、石巻文化センター、石巻市建設部道路課、佐藤敏幸氏、茂木好光氏、三宅宗議氏、調査に指導を賜った石巻市文化財保護委員、宮城県教育庁文化財保護課、以上の機関・各氏に本誌上を借りてお礼申し上げます。



▲ 田道町遺跡位置図 1/25000 点線は旧範囲



## 一、田道町遺跡について

田道町遺跡は、石巻市田道町一丁目にから二丁目にかけて存在する遺跡で、標高が一・五から一・八メートルの冲積平野の微高地にある。古墳時代から奈良、平安時代にかけての遺物が出土する遺跡として知られており、過去に古墳時代（南小泉式）の土師器の完形品が出土している。近くには、墨書き土器の出土している清水尻遺跡、奈良・平安時代の土師器が散布している横堀遺跡がある。

## 二、調査地点及び調査経過

今回の調査は、A・B・Cの三地点で実施した。（地図参照）

A 地点  
從来田道町遺跡の範囲外と考えられていたところ、宅地開発の事前協議が石巻市教育委員会にあった段階で、その職員が現地踏査を行ったところ、土器片の散布が確認され、田道町遺跡がこの付近まで伸びてきている可能性が高くなつた。そこで、開発に先立つて、まず遺構確認調査を実施することとなり、平成三年四月から事業者負担で発掘調査を開始した。その結果、古墳時代末から平安時代初年にかけての掘立柱建物跡、堅穴式住居跡、土壙、井戸跡、溝跡等が検出された。これらの遺構の保存について事業者・石巻市教育委員会・宮城県教育委員会・石巻市教育委員会の三者で協議したところ、遺構の存在していないところに計画していった公園を遺構のあるところへ移動、それについて事業者・宮城県教育委員会・石巻市教育委員会の三者で協議したところ、遺構の一部をそのまま保存し、残りの約二・〇〇〇平方メートルについて記録のみの発掘調査を行うこととなつた。十月末から調査を開始し、平成四年一月二十一日調査を終了した。

## 三、調査要項

### A 地点

調査員 石巻市教育委員会  
調査面積 約二・〇〇〇平方メートル  
調査期間 平成三年四月二十三日まで

作業員 長谷川信雄  
大沼忠雄  
鈴木友春  
稻田吉夫  
小泉文男  
龜山美代子  
松川利克  
小泉久美子  
佐藤ゆきの  
相沢利喜子  
渡辺千恵子  
勝又正男  
酒井清與  
西条芳子

### 四、発見遺構

#### A 地点

調査主体 石巻市教育委員会  
調査面積 約二・〇〇〇平方メートル  
調査期間 平成三年四月五日から

作業員 計長谷川信雄  
佐々木淳  
岡道夫  
鈴木友春  
稻川利克  
大友隆哉  
佐藤心一  
山上千子

木製品 C 地点から木簡が一点出土し、また、柱材が残っている柱穴があり、六点とりあげた。  
石器 アメリカ式石鎚が一点 C 地点から出土している。

り、残りの部分は盛土して遺構を保存することとなつた。五月月中旬から調査を開始し、途中長雨に悩まされ、また、予想外に遺構の数が多く当初の予定を超えて、

八月二十四日に調査を終了した。

### B・C 地点

作業員 長谷川信雄  
大沼忠雄  
鈴木友春  
稻田吉夫  
小泉文男  
龜山美代子  
松川利克  
小泉久美子  
佐藤ゆきの  
相沢利喜子  
渡辺千恵子  
勝又正男  
酒井清與  
西条芳子

調査員 石巻市教育委員会  
調査主体 石巻市教育委員会  
調査面積 約三・〇〇〇平方メートル  
調査期間 平成三年九月二十四日から平成四年一月二十一日まで

土器及び土製品  
土師器は、古墳時代前期（塙釜式、四世紀後半）のもの及び奈良時代末から平安時代初年（国分寺下屋式、表杉ノ入式、八世紀後半から九世紀前半）のもの多数が出土した。  
金属製品  
須恵器は、奈良時代末から平安時代初期（八世紀後半から九世紀前半）のもの多数が出土した。  
土製品は、土壙、紡錘車等が出土した。  
C 地点の奈良時代末から平安時代初期（八世紀後半から九世紀前半）のもの多數が出土した。また、鉄製の刀子、紡錘車、釣針等が出土した。

## 五、発見遺物

埴輪時代前期八軒、奈良時代末から平安時代初七軒、時期不明四軒、井戸跡二基、溝跡、土壙等を多数検出した。

### C 地点

作業員 長谷川信雄  
大沼忠雄  
鈴木友春  
稻田吉夫  
小泉文男  
龜山美代子  
松川利克  
小泉久美子  
佐藤ゆきの  
相沢利喜子  
渡辺千恵子  
勝又正男  
酒井清與  
西条芳子

調査員 石巻市教育委員会  
調査主体 石巻市教育委員会  
調査面積 約二・〇〇〇平方メートル  
調査期間 平成三年四月五日から

土器及び土製品  
土師器は、古墳時代前期（塙釜式、四世紀後半から九世紀前半）のもの多数が出土した。  
金属製品  
須恵器は、奈良時代末から平安時代初期（八世紀後半から九世紀前半）のもの多數が出土した。また、鉄製の刀子、紡錘車、釣針等が出土した。

作業員 計長谷川信雄  
佐々木淳  
岡道夫  
鈴木友春  
稻川利克  
大友隆哉  
佐藤心一  
山上千子

調査員 石巻市教育委員会  
調査主体 石巻市教育委員会  
調査面積 約二・〇〇〇平方メートル  
調査期間 平成三年四月五日から

土器及び土製品  
土師器は、古墳時代前期（塙釜式、四世紀後半から九世紀前半）のもの多数が出土した。  
金属製品  
須恵器は、奈良時代末から平安時代初期（八世紀後半から九世紀前半）のもの多數が出土した。また、鉄製の刀子、紡錘車、釣針等が出土した。

## 六、まとめ

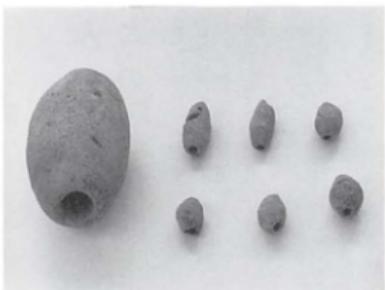
今回検出した遺構及び出土した遺物は、古墳時代前期と奈良時代末から平安時代初のものである。

古墳時代前期は、この付近は集落であったと思われるが、奈良時代末から平安時代初にかけては、木簡や帶金具のような特殊な遺物が出土したことや、一边が八メートルを超えるような大型の堅穴式住居、多数の掘立柱建物があり、單なる集落とは考えにくい。しかし、現段階ではその性格を確定するところまで整理作業が進んでいないので、現在鋭意整理作業を進めているところである。

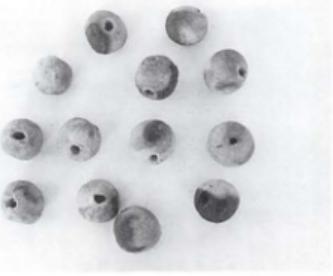
▲高坏(古墳時代前期)



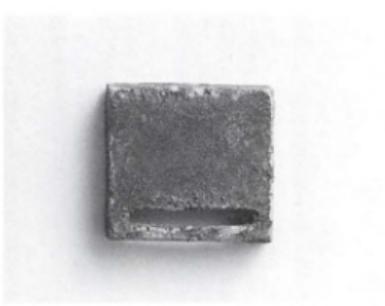
▲土鍤(奈良時代末~平安時代初)



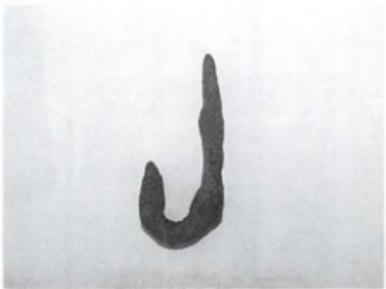
▲土鍤(古墳時代前期)



▲銅製帯金具(奈良時代末~平安時代初)



▲鉄製釣針(奈良時代末~平安時代初)



▲鐵製纺錘車(奈良時代末~平安時代初)



## 紙上文化財めぐり

### 歩いてみませんか：ふるさとの文化財

第四回の文化財めぐりは、ちょっと足をのばして渡波方面を歩いてみましょう。

渡波町は、天文年中（十六世紀後半）に佐々木肥後によって開拓されたと伝えられています。

JR東日本石巻線渡波駅を起点として出発しましょう。

① 渡波駅  
石巻線は、明治四四年（一九一）年に

#### ▲ 渡波駅



② 法巡山宮殿寺  
このお寺は渡波溪寺の第十世食州金悦和尚を開山として元和五年（六一九）に開かれたと伝えられています。

しかし、明治一六年（一八八三）の火災により堂宇は消失し、現在の本堂は昭和一七年に再建されたものです。

宮殿寺の山門前に三叉路があります。

このうち長浜海岸に向かう真ん中の道を進んでください。二つの四つ角を右に曲がると赤い大きな鳥居が目にはいって

工事が始められ、大正元年（一九一）仙軽便鉄道として開通したのが始まりでした。その後、大正八年（一九一九）日本国有鉄道石巻線となりました。

しかし、当初は石巻・小牛田間の開通であったため、稻井・渡波・女川の各町が路線延長の請願に奔走し、昭和一四年（一九三九）十月に現在の石巻線の全線が開通したのです。

昭和二年（一九三二）四月に民営化され、JR石巻線渡波駅として現在に至っています。

さて、渡波駅を降りたらすぐに右に歩いて行きましょう。渡波小学校を右手に見て、信号を渡つて真っ直ぐ行くと左手にお寺の山門が見えられます。

さて、渡波駅を降りたらすぐに右に歩いて行きましょう。渡波小学校を右手に見て、信号を渡つて真っ直ぐ行くと左手にお寺の山門が見えられます。

④ 潮塚  
境内の南側を通る道路に面して建てら

#### ▲ 伊去波夜和氣命神社



▲ 伊去波夜和氣命神社

⑤ 渡波本町  
この石柱は、今は使われなくなった町名を後世に残すために教育委員会が建てたものです。

「本町」は石巻、湊もありましたが、この町名はその町の根源の意味があるという説があり、最も古い町名の一つであると言われています。

渡波本町は、渡波の中で最も早く宿場

③ 伊去波夜和氣命神社  
かつては塙釜明神、浜大明神といわれていましたが、明治七年に現在の社名に改められました。

これは、平安時代に定められた「延喜式」にある牡鹿十座のうちの一つといわれていますが、同名の神社が稻井の水沼地区にもあります。いずれにしても由緒のある神社の一つです。

また、境内には沢山の石碑があり、渡波地区的信仰の歴史を探る上でも貴重なものです。の中の一つに「油塚（うしのづか）」があります。



#### ▶ 潮塚

神社を出て、前の道を真っ直ぐに東に歩いていきましょう。四つ角を通り抜け、三叉路にぶつかります。これを左に曲がり、歩いていくと一つ目の四つ角に石の柱が建っています。何でしょう。

神社を出て、前の道を真っ直ぐに東に歩いていきましょう。四つ角を通り抜け、三叉路にぶつかります。これを左に曲がり、歩いていくと一つ目の四つ角に石の柱が建っています。何でしょう。



▲ 旧渡波本町

した。  
鳥浜神社の縁起は、はその時の労苦を語り伝えています。  
塙田開発のために築いた堤防が夜毎破られ、修理してもまた同じことの繰り返しでした。ある夜、与惣右衛門の夢枕に

◆鳥浜神社



に指定された町で、江戸時代には女川、遠島（牡鹿半島）への陸路・海路の基地としてにぎわいました。  
旧本町の通りを抜けて、県道石巻鶴川線を横切って、また歩いていきましょう。  
交通量の多い道ですから、皆さん横断するときには、充分注意してください。

しばらく歩くと左側に宮城県立水産高等学校が見えます。そのまま進んでいきましょう。塙田町の三叉路が見えてきました。その細い道を入っていくと、正面に神社が見えできます。これが「鳥浜神社」です。



▲ 梨木畠貝塚



▲ 身基



▲ 祝田の子持ち地蔵



案内 石巻市教育委員会

にかけてと、奈良・平安時代を中心とした貝塚です。特に、縄文時代早期の土器は、「梨木畠式」として縄文時代の標識となる土器形式となつおり、石巻地方では最も古い遺跡の一つです。

昭和三八年東北大学により発掘調査が行われました。

梨木畠貝塚を後にして、再び浪波の方へ歩いていきましょう。先程の久米幸太郎仇討ちの地の標柱が立っている三叉路を左に入っていきましょう。法音寺の入口を登つて境内を過ぎ、山道を道なりに登つていくと、頂上に公園が見えてきます。潮見台公園です。ここはこの地方では珍しい両墓制のある所です。

① 祝田の子持ち地蔵

祝田浜の旧家では、珍しい両墓制が行

われていました。通常遺体を埋葬してそ

の上に石などで墓標を建てるのに対し、両墓制とは、遺体を葬る埋め墓と、死者の靈をまつる語り墓と、墓が二つある土

葬による墓制をいいます。

祝田浜では、埋め墓を身墓（みはか）語り墓を空墓（からはか）と呼んでいま

す。このような風習は、宮城県では祝田浜だけにしかありません。全国的には近畿地方に多く分布していますが、やはり東北地方や九州地方では少ないようです。

法音寺の参道を戻つて、左に歩いていくと民家の前に一体のお地蔵さんが立っています。これが、祝田の子持ち地蔵で

ます。皆さんお疲れになつたでしよう。お地蔵さんを過ぎると、万石油の水道が見えました。左折して、その水道沿いに少し歩いていくと、松の木の下に石の塔があります。

皆さんはお疲れになつたことでしょう。もう少しです。頑張つて歩きましょう。お山までの里程が刻まれています。

このころは、寺社參詣が活発になり、石巻地方でも金華山参詣の人々で賑わいました。この常夜燈は、金華山街道の道標の役割も果たしています。

このころは、寺社參詣が活発になり、石巻地方でも金華山参詣の人々で賑わいました。この常夜燈は、金華山街道の道標の役割も果たしています。

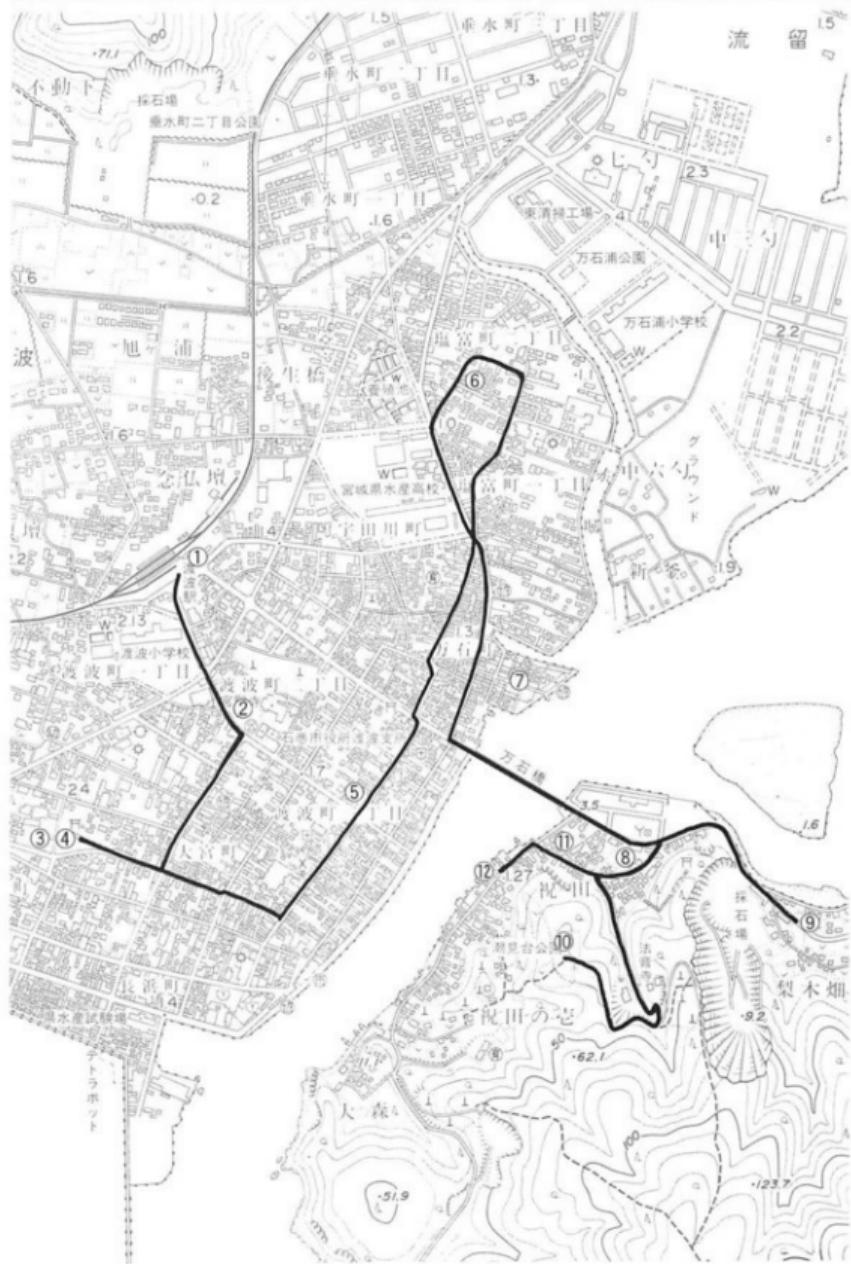
した。皆さんお疲れになつたでしよう。

本日の文化財めぐりはこれでおしまいです。いかがでしたでしょうか。今後も、市内の文化財めぐりを実施したいと考えております。

本日は、お疲れさまでした。気をつけでお帰りください。

▶ 常夜燈

② 祝田の常夜燈



# 平成三年度

## 文化財めぐり

第三回文化財めぐり  
太平記と石巻

第一回文化財めぐり

月 日 十一月十七日(日)

講 師 佐藤雄一 石巻市文化財保護委員

参 加 者 二十三人

でめぐり、十五時二十七分発のマーメイド号で島を後にしました。

第一回文化財めぐりは田代島、第二回は山形県米沢市、第三回は市内湊地区の文化財を見学しました。

いずれもよい天気に恵まれ、所期の目的を果たすことができました。

なお、例年のことではありますが、申

込みの受付開始とともにたくさんのご応

募をいただきありがとうございました。

ただ、すぐに定員いっぱいになつたので、

参加を希望されたのにもかかわらず、参加できなかつた方が多数ございましたことをお詫び申し上げます。

田代島での文化財めぐりは、島民以外にはあまり知られていない、しかし、たいへんに貴重な文化財に触れる

ことができ、有意義な一日でした。

田代島での文化財めぐりは、島民以外にはあまり知られていない、しかし、たいへんに貴重な文化財に触れる

ことができ、有意義な一日でした。

### 第二回文化財めぐり

#### 米沢の歴史をたずねて

月 日 十一月十日(日)

講 師 石垣安石巻市文化財保護委員

参 加 者 四十三人

でめぐり、十五時二十七分発のマーメイド号で島を後にしました。

第一回文化財めぐりは、島民以外にはあまり知られていない、しかし、たいへんに貴重な文化財に触れる

ことができ、有意義な一日でした。

### 第一回文化財めぐり

#### 田代島の自然と歴史をたずねて

月 日 十月三十日(日)

講 師 佐藤雄一 石巻市文化財保護委員

参 加 者 三十二人

でめぐり、十五時二十七分発のマーメイド号で島を後にしました。

第一回文化財めぐりは、島民以外にはあまり知られていない、しかし、たいへんに貴重な文化財に触れる

ことができ、有意義な一日でした。

第一回文化財めぐりは、島民以外にはあまり知られていない、しかし、たいへんに貴重な文化財に触れる

ことができ、有意義な一日でした。



▲第一回文化財めぐり



▲第一回文化財めぐり



▲第一回文化財めぐり

良美(わらび) 大網、三石観音等を徒步歩

## 旧町名表示石柱設置事業

### 由緒ある町名を後世に

—町名は文化財—

昭和三七年（一九六二）に「住居表示に関する法律」が制定され、から、昔から使われていた町名は新しい町名に置きかえられるようになりました。そのため、古い町名はそこに住む人々も忘れられてしまうような状況になりました。石巻市以外ではありません。町名は、私の祖先がその土地とどのようにかかわってきたかを知る重要な手掛かりであり、かけがえのない文化財なのです。

今、日本各地では、町名も文化財であるという認識を持ち、住居表示を行わない、あるいは、なるべく古い町名を生かす、さらに失われつつある町名を記録のなかだけでも保存するなど、何らかの方法で町名を残す運動が起きています。

石巻市教育委員会では、すでに使われなくなつた由緒ある町名を後世に伝えるため、古い町名とその由来を石に刻んでその地区に建立する事業を昭和五六年度から行い、平成二年度までに二二本を設置いたしました。本年度は、「渡波裏町」と「赤土山下」の二本を設置し、これで合計二三本になりました。

設置にご協力をいただいた方々に、厚くお礼上げます。

平成二年度までに設置した旧町名石柱

- ▲昭和五六年度設置▼  
〔鶴山〕 = 鶴山町（鶴山神社境内）
- 〔蛇田町〕 = 蛇田町（鳥屋神社境内）
- 〔裏町〕 = 中央一（まるみ呉服店前）
- 〔小野寺横丁〕 = 立町一（梅屋分店前）
- 〔平成二年度設置▼  
〔田町〕 = 八幡町四（稻井嘉明氏宅前）
- 〔東町〕 = 湊町（稲井嘉明氏宅前）
- 〔平成元年設置▼  
〔御所人〕 = 清水町（ニイスマビル前）
- 〔後町〕 = 中央二（西光寺前）
- 〔袋谷地〕 = 水明南二（長林寺前）
- ▲昭和六〇年度設置▼  
〔本町〕 = 中央一（中央一郵便局前）
- 〔坂下町〕 = 中央一（永義寺参道入口）
- ▲昭和六一年度設置▼  
〔本草園〕 = 双葉町（双葉町公園内）
- 〔御所人〕 = 清水町（御所人公園内）
- 〔昭和六三年度設置▼  
〔田町〕 = 立町一（梅屋分店前）



渡波裏町（末永隆紀氏宅前）

赤土山下（市道穀町六号線緑地内）

石巻最初の宿場である「本町」の裏手の町の意を示すという説があり、同様に佐々木肥後によつて開拓されたと伝えられ、江戸時代には根岸村郷として扱われた。

安永二年（一七七三）の「根岸村郷渡波町土記延書」には、「本町」ハ寛永八年裏町は延宝八年・中略・時場二被相立候事」と記されており、この時期には「裏町」は成立していたと考えられる。

渡波町は、天文年中（一六世紀後半）に佐々木肥後によつて開拓されたと伝えられ、江戸時代には根岸村郷として扱われた。

安永二年（一七七三）の「根岸村郷渡波町土記延書」には、「本町」ハ寛永八年裏町は延宝八年・中略・時場二被相立候事」と記されており、この時期には「裏町」は成立していたと考えられる。

赤土山下は、明治時代の始めに北上運河が開通すると、それまで栄えていた旭町に代わり、石巻の玄関口として栄えたようになつた。一带には米穀商を中心とする多数の商家が軒を連ね、通称「穀町」と呼ばれるようになり、現在ではこの通称が住居表示の町名として使用されている。

## 文化財標柱・説明板設置事業

# 文化財を大切にしましょう

日本全国には約三〇万か所の遺跡（周知の埋蔵文化財包藏地）があり、石巻市内にも約一〇〇か所の遺跡があります。これらの遺跡（周知の埋蔵文化財包藏地）は、文化財保護法で保護する対象になつておらず、そこで工事をするときは文化庁長官への届け出が必要です。石巻市教育委員会では、この遺跡（周知の埋蔵文化財包藏地）の存在を広報するため、標柱と説明板を建てています。全部の遺跡（周知の埋蔵文化財包藏地）に建てたわけではありませんが、この標柱や説明板のあるところは、遺跡であり、現状を変更しようとするときは、石巻市教育委員会と宮城県教育課文化係へ相談してください。

本年度は、標柱一本、説明板一基、案内板一基を設置しました。

### 説明板

石巻鉄錠場跡  
享保年間（一八世紀初）以降、仙台藩

な石巻に置かれ、幕末まで断続的に鋳造が続けられた。はじめてのうち、銅一文錢が鋳造され、領内と江戸で売られ払われた。やがて、領内だけで売り扱われるようになつた。さ

らに賣の悪い黒鐵一文錢が鋳造され、領外へ流出し、銭相場を下落させ、全國的な経済混亂の一因となつたりした。

天保八年（一八三七）の平面図によれ

ば、石巻鉄錠場跡は、八〇間四方の周囲を堀と竹矢来に囲んでいた。（表御門、「改御門」、「黒御門」、「納御門」と四つの門があり、非常に厳重な構造になつてゐる。）

本年度は、標柱一本、説明板一基、案

所、台所等が配置されていた。

鉄錠場の操業は、石巻町場の経済へも大きな影響を与えた。操業がないと石巻の町場は火の消えだよになつたといふ。

平成三年三月 石巻市教育委員会

### 湊小学校遺跡

過去に慶手刀（六七七世紀頃の柄がワラビの形をしている刀）が出土している遺跡で、隣接する五松山洞窟遺跡との関連が注目される。

### 石巻市文化財だより（第21号）

平成4年3月30日 印刷  
平成4年3月31日 発行

発行：石巻市教育委員会  
石巻市日和が丘一丁目1番1号  
電話（0225）95-1111内線345

印刷：株式会社 鈴木印刷所  
石巻市船田字新谷地前121  
電話（0225）22-4101

### 【標柱】

#### 明神山下貝塚

明神山の東側裾部（標高一・五㍍）に立地する縄文時代の貝塚である。ハマグリを中心とする厚さ一㌢の純貝層があった。

#### 渡波塙田跡地

江戸時代初期、杜鹿郡流留村の菊地守忠右衛門により、下総の行徳塙田の技術を導入して万石浦西岸に渡波塙田が開拓され、昭和三五年の第三次塙業整備により廃止された。

#### 草刈山古碑群

本碑群は御所入草刈山地区から移転した大型の板碑群で、特に吉野先帝菩提碑と同じ「奉為」と刻まれる表現は、その年代を考えるうえで、貴重である。

#### 高木古墳跡

東側には四一五段からなる段築が明確に残り、南北両端には館を区画する見事な空堀が二本ずつ設けられている。

#### 内原遺跡

この遺跡は、主に平安時代前期（約一千三百年前）頃に形成される集落跡であり、一帯からは須恵器、土師器等の古代の土器の破片が発見されている。